

エイジ・オブ・サイヤン

イナゴライター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は、サイヤ人がまだサイヤ人と名乗る前のずっと昔の話。

目次

サイヤ人の誕生	1
訪問者	3
フルムーン	6
共鳴	9
ダイオウ	12
教育	15
プレデター	19
衝突	22
低燃費	26
親子	29
奈落	32
修行	36
ファースの力	40
三銃士	43
最悪	46
絶滅	49
家畜泥棒	53
接触	58
再会	62
朝活	68

サイヤ人の誕生

ここは名もなき惑星。

密林に覆われた巨大な惑星。

多種多様の生き物が住んでいる。

そしてその生態系の頂点に立っているのが

後に戦う事を生業としたサイヤ人となる大猿のバケモノ達。

見習い界王神「界王神様、銀河の外れにこんな美しい星があったのですね。」

界王神「うむ。じゃがここの生き物はちよいと醜くてのお、野蛮な大猿達がデカイ顔して牛耳っておるのじゃ。

数こそは少ないが群れて暴れたりするからのお…。」

見習い界王神「なら破壊神様が目をつけるのでは？」

界王神「いや、あやつはダメじゃ。この間双子の孫が産まれたらしくて

『おい、界王神！孫はいいぞ!!ワシはこの子達を立派な破壊神にするんじゃ！ガハハハ』と、言っていたからな。」

見習い界王神「その様子だとしばらく休業ですね。しかしあの方意外に子煩悩なんですね、はは」

界王神「お、そうじゃ！それならお主、ちよいとあの大猿共に手を加えてみぬか？どうせ放っておいてもいずれ滅ぶ。」

見習い界王神「いいんですか、界王神様ともあろう方がそのような事を言つて…、それに生態系に手を出すのもどうかと。

滅ぶというのも、それは自然の摂理ではないですか。」

界王神「はあ…。堅いのお…。じゃからお主はいつまで立っても界王神になれぬのじゃ。この頭でつかち！」

見習い界王神「なっ!!なんて事を…。わかりましたよ、わかりました。」

どーなつても知りませんかね？」

見習い界王神が手をかざすと、一瞬星全体がオーラに包まれた。界王神「やれば出来るではないか、どれどれちよいと様子を見てみようかの」

ノリノリで探索に向かう界王神とは裏腹に、見習い界王神は呆れた顔で後を追った。

しばらく星全体を飛び回ったがそれらしい姿を目撃しない界王神達。

界王神「お主、大猿共にどんな手の加え方をしたんじゃ？まさか消しきったりしたのか？」

見習い界王神「いえ、少しばかりコンパクトにして、我々と似たような姿形にしたつもりですが…。」

界王神「それを先に言わんか、地上へ降りるぞ。」

地上へ降りてすぐ、2人の目に止まったのは

3人で固まっている原始的で知性も持ち合わせていない人のような生き物。

ボサボサの頭髮に筋肉質な体、そして特徴的な尾。

鋭い目つきをしたその生き物は界王神達を見るや否や襲いかかってきた。

しかし2人はスルリとかわして再び宙を舞った。

界王神「センスが無いのお。なんじゃあの尻尾は？あんなアクセサリー流行って無いぞ。それに筋肉質な体をしているとは言え、この星で生きていくには弱々し過ぎる。逆に絶滅を早めてしまったのお。」

見習い界王神「はい…すみません。私の力不足でした。もう一度やり直してもよろしいでしょうか。」

界王神「いや、もうこのままで良い。しばらく様子を見てみよう。」

そして見習い界王神は少し落ち込み気味にこの星を後にした。

訪問者

界王神達が惑星バチを離れてから
3000年程の時間が流れた。

惑星バチの大猿達はだんだんと知性を身につけていた。
しかし、彼らの文明はまだ原始的な狩猟民族の枠を少し越えた程度
に過ぎない。

言葉や文字等発生してはいるが

3000年という時間をかけてこの程度にしか進化出来なかった
のは

戦いや、狩りにほとんどの時間を費やしていたからである。

そして致命的なのが、繁殖力。

元々生態系の頂点に立っていた彼らは数が少ない

その上、女であれば戦いに赴く傾向が強い為

早くに命を落とす若者が後をたたない。

このような悪循環の環境下で生きている彼らは

みるみる数を減らしていき、ついには絶滅が危惧されるまでになっ
ていた。

しかし、そんな環境に終わりを告げる時が来たのは

そう遠くない先の事であった。

エギーラ星人に故郷であるツーボ星を侵略され、

宇宙を彷徨い新たな宿木となる星を求めていたイカパス星人達の
訪問。

イカパス人A「美しい星だ：ツーボ星に良く似ている。資源も豊富
そうだし着陸してみよう。」

イカパス人B「ああ、だがこれだけ緑と水が豊富な星だ、知的生命
体がいってもおかしくはない。少し探索機を飛ばして様子を見てみ
る。」

高度な文明を持つイカパス星人は、何百機もある探索機を一斉に飛ばした。

しばらくして探索機は母艦に戻ってきて、イカパス星人は情報を収集した。

イカパス人B「んー、生物は中々の数はいるが知的と呼べる程の生命体は存在しないな。この猿のような生物が少し気にはなるが問題無いだろう。」

イカパス人A「よし、なら着陸する。みんな！我々の長い旅も今日で終わりを迎える！今日からは忙しくなるぞー！」

和気あいあいと盛り上がっているイカパス星人達はまもなくしてこの惑星バチに着陸した。

子供イカパス「ねえねえ！見て！あそこにサダラがいるよ！」

母イカパス「あらっ、ホントね！サダラそっくりだわっ！」

イカパスB「サダラ？とはなんですか？」

子供イカパス「おじさんサダラ知らないの？metuberのヤミキンのペットの猿だよ！」

イカパスA「あー、聞いた事あるぞー！」

イカパスB「なら彼らはサダラ人とも呼ぼうか、ふふ」

イカパスA「よし、なら早速コンタクトをとってみるか。あのサダラ人に」

イカパスB「待て、急に脅かして襲われでもしたらたまったもんじゃない。それに言葉が通じるかもわからない。一応護衛にクラアとケーンの兄弟を連れて行け。」

後ろから現れた大柄の男達。

彼らはイカパス人最強の兄弟。

クラア「いえ、我々が2人であるの猿の所に行きます。A殿はそこで待っていてください。」

イカパスA「そうか？それなら万が一を取って君たちに任せる。何かされても困るしな。」

ケーン「何かされたら殺っちまってもいいかあ？」

クラア「我々は客だ。無礼な真似はよせ。では行くぞ。」

兄弟はサダラ人の目の前まで歩み寄った。

近くに来てわかったが、このサダラ人、

姿こそ原始的ではあるが、体から滲み出る殺気と威圧感でクラアとケーンは一瞬身構えた。

クラア「やあ、君。言葉はわかるかい？私はクラア、こいつは弟のケーン。この星の外から来た、いわゆる宇宙人てやつだ。君はこの辺りに住んでるのかい？名前は？」

サダラ人「……」

ケーン「ダメだアニキ、こいつてんでわかってねえ。ただの原始人だ。」

クラア「やめろ、ケーン。無礼な真似はするなと言った筈だ。すまないなサダラ人。」

サダラ人「…サダラ…人…？」

サダラ「獲物…見つけた。」

フルムーン

ケーン「へっ！弱っちい奴だったなアニキ！俺達が出る事なかったんじゃねえのか？」

闘争本能剥き出しでいきなり遅いかかってきたサダラ人を
まるで赤子の手をヒネるように捻じ伏せてみせたケーン。

クラア「やれやれ…。お前という奴は本当に我慢が出来ない男なのだ。勢い余って殺したりしてないだろうな？」

ケーン「さあどーだろうな、グツタリしてやがるぜ。ホレっ！」

ケーンはサダラ人の尻尾を掴み持ち上げた。

まるで雑巾か何かを掴んでいるかのようにダランとしている。

クラア「このままここに放置しておくわけにもいかまい。一応手足を縛って船に連れて帰れ。」

ケーン「ちっ、めんどくせえなあ。」

クラア「コミュニケーションを取る事は難しいと思われます。そしてこのダメな弟が殺してしまいました。」

宇宙船の片隅にゴミのように置かれたサダラ人を

皆興味津々で眺めていた。

イカパスC「ふむ。実に興味深い生き物じゃな。ちよいとワシの研究室でイジってみてもええかの？」

イカパスB「ええ、構いませんよ。サンプル等は取っておいて下さい。この星の生物の詳しい情報がわかるかもしれません。」

診察台の上に置かれたサダラ人に研究者達が特殊な器具を取り付けていた。

彼らの技術は一切メス等を使わない切らない解剖。

イカパスC「よし、このまま一晩放っておこう。夜が明ける頃にはデータも取れておるじやろ。」

長旅の疲れもあつてか、研究者達は皆足早に各自室へと戻って行った。

日も沈みかけてきた頃

診察台に1人ポツンと横たわったサダラ人の目がかすかに開いた。

ここは研究室とは言え、宇宙船の中

サダラ人の頭上近くには大きな窓がある。

少し頭を動かすと外の景色が良く見える。

今宵は月に1度、月が真円を描く時。

ドクン

ドクン

ドクン、ドクン、ドクン。

この時のサダラ人の鼓動は体外に響いてわかる程の大きさ。

人型に姿を変えられ、体毛等は頭髪以外ほとんど失っていた体から
どんだん毛が生えて体全体を覆った。

それと比例するかのよう

筋肉質だった肉体も更に肥大化していき

顔面までもが原型を失う程に変化した。

サダラ人は、遙か昔の祖先の姿へと変貌を遂げた。

ガクンッ!

大猿の姿になったサダラ人の体重を支えるには華奢過ぎる宇宙船
が一瞬沈んだ。

それと同時に研究室の天井を突き破り上半身を乗り出した。

イカパス人A「なっ!!なんだこの音はっ!!」

宇宙船の警告音がけたたましく艦内に響き渡る。

ビー!ビー!ビー!

非常事態発生。

Dフロア損壊、Dフロア損壊。

警告のアナウンスも流れているが、イカパス人達の悲鳴に打ち消される。

ウガアアアアアアアアアアアア!!!

大猿は雄叫びを上げながら、両腕を振り回し宇宙船を破壊している。

イカパス人達は死に物狂いで宇宙船からの脱出を試みるが

もうすでに出口に向かうまでもない程に破壊され

艦内が露出している。

家族と逸れた子、怪我をして1人で動けない者、命を落とした者。

絶望に直面していた。

大猿はそんな事お構いなしで宇宙船の上に乗り上げ、

地面が揺れていると錯覚するほどの音でドラミングをしている。

ドンツ!!ドンツ!!ドンツ!!ドンツ!!

イカパス人B「なんて事だ……。我々はとんでもない星にやってきてしまった……。終わりだ……。今度こそ我々は絶滅してしまう……。」

共鳴

ケーン「なんだありやあ。アニキ！あのデケエ猿俺達の船をめちやくそにしてやがる！」

クラア「ああ、どうやら我々はこの星の住人にならざるを得ないな。」

ケーン「まあいいぜ、ちようど体もナマツててウズウズしてたからな！ちようどいい準備運動になりそうだぜ！」

森に避難するイカパス人を尻目にケーンは大猿に向かって勢いよく走り出した。

こちらに向かってくる小さな生き物を獲物として認識した大猿は、大きく腕を振りかぶり

ケーンに向けて巨大な拳を振り下ろした。

ズガアアアアン!!!

命中したかにおもえたが、地面にポツカリ穴が空いているだけで間一髪のところケーンは回避していた。

クラア「ほう…。」

ケーン「なんでえ、お前中々はえーじゃねえか！しかも中々のパワーだな！」

ケーンは大猿の顔付近まで大きく跳ね上がり顔面を蹴り上げた。

しかしバランスを崩して片膝を着いた程度で

大したダメージになっていない。

片膝を着いたと同時に、まだ地面に着地していないケーンを左手で鷲掴みし渾身の力を込めて握りしめた。

ケーン「がつ…!!こいつツ…！なんてパワーだ…ぐっ！アニキ！手を貸してくれええっ!!」

そう言っている間にも大猿は力を緩める事はなく、右手で左手を更に覆った。

ミシミシ

ケーン「うっ…や、やべえ…ア…アニキ…！」

クラア「使えないイカパス人等…。いや、やれやれ手の掛かる弟だ

…。」

音も無くクラアの姿は視界から消えた。

と、思った瞬間腹部に強烈な痛みが大猿を襲う。

グアアア…！

大猿は痛みで咄嗟に両手を離し

ケーンは地面に落ちた。

クラア「野蛮な猿め。」

ケーン「くっ…。何本か折れちまった…。クソツ」

大猿は一步、二歩と

後ろへ後退りして、再び立ち止まり

空に向かって咆哮を上げた。

ケーン「けっ…。負け犬の遠吠えかよ…。」

クラア「…。いや、こいつまさか。」

叫ぶの止め、辺りは静寂に包まれた。

両者は睨み合いながら動かない。

ケーン「な、なんだってんだよ。」

クラア「待て…。」

アアアア…

アアアア…

微かにだが遙か遠くの方から何かが聞こえる。

そしてその何かは確実にだんだんとボリュウムを上げて近付いてきている。

ケーン「こいつ、まさか仲間を呼んだってのか！」

クラア「…そのようだ。一匹二匹ならどうって事無さそうだが、群れられると厄介だ。一旦逃げるぞ。」

クラアがケーンの腕を掴み、肩に掛けようとした時。

森の方からイカパス人達の悲鳴が聞こえた。

クラア「しまった！もうこんな近くまでッ！」

姿こそまだ見えないが、確実に数頭の大猿達がかなりの近さまで接近している。

目の前の大猿も2人を逃さまいと、戦闘態勢に入った。

ウガアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

大猿が2人を捕まえてようと両腕を伸ばしたが

クラアの超スピードには及ばず空振り。

ケーン「アニキ：すまねえ。」

クラア「いや、そんな事はどうでもいい。早く仲間の所へ行くぞ。」

シュン。

シュン。

瞬く間に森の奥へと消えて行ったが

大猿は大きく息を吸い、口を開け2人の進行方向へ気弾を放った。

着弾点はイカパス人達の集団がいたと思われる地点。

クラアはケーンを連れ、一瞬で集団の近くまで来たはずだったが

姿が見えない。

イカパスA「クラア、ケーン。こっちだ！俺達戦闘タイプじゃないやつらは擬態が出来る！あそこに洞窟があるからそこに入るんだ！」

ケーン「ああ、そうだったな。羨ましい能力だぜ全く：。」

事なきを得た彼らだったが、この恐怖の中眠れる者が居るはずもなく

皆身を寄せ合い夜を明かした。

ダイオウ

悪夢のような日から数ヶ月余りがたった。

イカパス人達はこの星の環境に順応して来ていたが、やはりあの日の恐怖が記憶から消える事は無く

皆怯えて隠れながら生きていた。

しかしやはり収穫はあり、大猿、サダラ人の謎が解明されつつあった。

サダラ人という人種は変身タイプの宇宙人であり、満月がその引き金になるという事は皆に知れ渡っていた。

クラア「A殿、ちよつとした提案なのですが。我々の生活にも少しばかり平穩が訪れつつあります。しかし、いつまでもこのような影の中の生活にも限界がございます。若者の中には、満月の時だけ外にいなければいい。と思っっている者もおります。」

そう切り出したクラアが提案したのは、

イカパス人達の抑止力となる、戦闘タイプのイカパス人の育成。

イカパスA「しかし、我々は元々戦闘タイプはなかなか産まれにくい種族。エギーラ星人に侵略されてから、戦闘タイプのイカパス人はお前達2人しか生き残っていないんだぞ?」

クラア「ええ、ですがお忘れでしょうか?我々イカパス人は成人するまでタイプはわかりません。なので若いうちから鍛え上げておけば、戦闘タイプでなくても戦力にはなります。」

しばらくやり取りは続いたが

皆の意見を聞いてみるという話に至った。

イカパスA「…きつと、誰も賛成はしないぞ?」

しかしAの予想は外れる事になる。

イカパスの人々は、いままでに数々の実績を残して来たクラアへの

信頼と、

彼の人情的な人柄から

自ら志願する若者や、我が子を鍛えてくれ、と言う親達が後をたたなかつた。

こうしてイカパス人の戦闘タイプの育成が始まる事となった。

類稀なる才能を発揮する者や、離脱者等、様々な者達がいたが

3か月も経つと

しつかりと精鋭部隊として形になりつつあった。

イカパスA「素晴らしい成果だな、クラア。これで皆も少し安心できらるだろう。」

クラア「いえ、確かに大幅な戦力向上にはなりましたが、まだまだ皆を守る程の集団とは言えません。」

ケーンが若者達を鍛えているのを離れて見ていたクラアにAが話しかけた。

イカパスA「ところでなんだが、お前はみんなからの信頼も厚い。今となってはツীব之星の王もいないし、どうだ？お前がこのイカパスの王となつてみる、というのには？」

予想外の提案に少し驚いた顔を見せたクラアだが、イカパスの人々にも指導者のような存在は必要と考えていた為、その提案を受け入れた。

クラア「しかし、我々だけで決めるといふのも。皆の意見を聞いてから決定したいと思います。」

全てのイカパス人が集められ、事の経緯を話したが

否定する者等誰一人としておらず、満場一致であった。

簡単過ぎる王の誕生だが、彼らにとつてのクラアは正に英雄と言える程の存在で

今の自分達があるのはクラアのおかげ。と誰もが思っていた。

イカパスA「ここに我らの新たな王が誕生した！皆、クリア王に忠誠を！」

新たな王の誕生に皆が喜び、ひとときの平穏と和やかな雰囲気包まれ

イカパスの人々は希望の光を見出そうとしていた。

そして、その一部始終を遠くから見ていたサダラ人がいた。

？「なんだあの生き物は、見た事が無いな。どうする、コウライ。一匹捕まえてみるか？」

コウライ「∴。ああ、そうだな。」

教育

「は、離せー猿野郎……」

コウライ「話せるのか、この生き物……」

？「珍しい生き物だな。お前何者だ？」

イカパス人「う、うるせえ野蛮なサダラ人めッ！」

コウライ「サダラ人……？この間ジベの野朗が言っていたな。」

？「ジベが捕まった変な奴らとはこいらだったのか。妙な生き物だな。お前、どこから来た。」

イカパス人「お前らみたいな猿達に誰が教えるか！ガハッ！」

？「口がかてえなあ、殺しちまおーぜ。コウライ」

コウライ「よせ、ウーリ。一旦連れて帰ろう。」

ウーリ「……。ちつ。命拾いしたな。」

謎の生き物を村へ連れて帰ってきた、コウライとウーリ。

連れて帰って来たものの

尋問や拷問の経験など無い彼らにとって、情報を引き出すのは容易では無く、

結局宇宙の外から来たという事しか得られなかった。

ウーリ「なんだウチュウって？知ってるか？」

コウライ「さあ。新たな食料を見つけたって事だけで、俺達にはどうでもいい事だ。」

ウーリ「まあな！しかしこいつの肉は弾力つーのか？モチモチしててあんまし好きな味じゃあねえなあ。」

コウライ「ふ、だからお前は田舎育ちなんだ。この食感と、臭みの無い味が織り成すハーモニー。ワッサビザウルの鼻糞と、シヨウユーザウルの血をブレンドさせてこの肉につけて食ってみろ。きつとうめーぞ。」

ウーリ「……。やっぱりお前は変わりもんだな。ところでお前、ガキが産まれたんだってな？こいつの肉は俺の口には合わねーから、お前

んとこのガキに食わせてやれよ。」

コウライ「なんだ、知ってたのか。ガキに食わすにはもったいねえが、強くなつてもらわねえといけねえからな。ありがたく頂戴するぜ。」

3日後。

イカパス女「ダイオウ様！う、うちの人がもう3日も帰らないんです…。あの人が何も言わずに出て行くなんて考えなくて！あの人の身に何かあったんじゃないかって…。うう。」

クラア「…そうか。ただちに調べさせてみよう。ケーン、聞いたか？2、3人の小隊を連れ、行方不明になったイカパスの仲間を探せ。」
ケーン「おお！やつと俺の出番が来たか！任せてくれ、準備が出来次第すぐに出発する！」

ケーンは小隊を連れ直ちに探索を始めた。

普段イカパスの人々は危険があつてはならない、と外を出歩く事を禁じられていた為

ケーン以外の3人は少し緊張気味だったが

そんな事はお構いなしに森の中をどんどん進んで行く。

イカパス1「た、隊長！もう少し警戒しながら進んだ方が…。初の任務で皆緊張して…。」

ケーン「何を弱気になつてんだ、バカたれ！ワクワクしねえのか？ガキの頃探検した事あるだろ？そんな感じでいんだよ！それに何か出てきても俺がなんとかしてやつから黙って俺について来い！」

イカパス2「は、はあ…。(この人、お兄様がダイオウ様になつてからずっと寂しそうにしてたから…。隊長に任命されてよっぽど嬉しいのかな…。)」

かなりの時間をかけて森を探索したが、

有力な手掛かりを見つけられず、日も暮れだし

帰路につこうとしていた時。

イカパス1「隊長ツ！何か聞こえます！」

ケーン「ああ、聞こえた。静かに…身を潜めろ。」

「やああ！」

「そうだ、いいパンチだ。」

ケーン「あいつは…。この間のサダラ人…。生きていたのか。ガキも連れてやがる。」

ジベ「よし、今日はここまでだ。帰って休め。」

ケーン「おい！サダラ人！久しぶりだな！まさか生きてやがったとはな！」

ジベ「き、貴様は…！」

サダラ人子供「父さん、知っているの？」

ジベ「お前は隠れている…。」

ケーン「へっ！ガキ共々ここで始末してやるぜ！」

イカパス1「隊長ツ！待って下さい！我々の目的は仲間の探索です！イザコザを起こす訳には行きません！ここはただちに引き上げるべきです！」

ジベ「…仲間？この間ウーリの野郎がいい振り回してた奴の事か…。」

ケーン「何？やっぱりてめえらサダラ人の仕業か！俺達の仲間を何処へやった！」

ジベ「…貴様に喋る事は何も無い。」

ケーン「喋る気がねえなら、喋りたくなくなるまで可愛がってやるぜ！

おい！イカパス3！ガキを捕まえろ!!」

ジベ「よせっ!!」

抵抗しようといカパス3に襲いかかろうとしたジベだが

一瞬早くケーンがジベのみぞおちに一撃を加えた。

ジベ子「父さああん!!うげっ!」

イカパス3「大人しくしてろ!猿のガキがツ!」

ジベの子はあっけなく気絶させられ、力なく地面に倒された。

ジベ「ぐツ…、貴様ら…殺してやる…!」

ケーン「ほー!威勢だけは立派だなあ!だが、また前のようにぶちのめしてやるぜ、今度は二度と起き上がれないようになあ!!」

怒りに任せたジベの抵抗は、以前よりも強力なものになっていたが冷静さを失っていた為に大きな隙が生まれ

またしても敗北する事になった。

ケーン「はあ…はあ…。ちっ、てこずらせやがって…。この俺様に本気を出させるとはな…。おい、こいつをキチンと始末しておけ。それと、そのガキは連れて帰るぞ。」

イカパス2「隊長にここまでさせる程とは…。悪いが死んでもらうぞ。」

ジベ「…ち、ちくしょう。俺に、力があれば…す、すまない…

『ベジータ』……

プレデター

愚か者があ!!

普段あまり感情を表に出さないクラアが声を荒げた。

ケーン「し、しかし、今回ばかりはちゃんと始末した! それにあの時あーするしかなかったんだ!」

クラア「…そのガキはなんだ? 死体の処理は? 追手は確認したのか? だからお前は未熟なのだ弟よ。俺をガツカリさせるんじやあない。」

ケーン「…す、すまねえ。もうヘマはしねえよ…。」

クラア「ふんっ。で、仲間の手掛かりは何か見つけたのか?」

ケーン「…手掛かりつて程の事でもないが、殺したサダラ人の仲間が何か情報を掴んでいるみたいだ。」

クラア「ちっ、やはり我々の存在はバレているか。」

クラアは不機嫌そうにサダラ人の子供の顔をまじまじと眺めた。しばらく眺めていたが、近くのダイオウ親衛隊員に鎖で繋いでおけ。と命令し、その場を後にした。

その頃サダラ人の村では。

コウライ「おい、ウーリ。今日もあのウチユウ捕まえに行かないか?」

ウーリ「ウチユウ?…ああ、あいつらか、いいぜ!」

2人は村を離れて森を進んでいた。

ウーリ「そう言えばよ、お前んところガキはどうなんだ? 強そうなのか?」

コウライ「さあ…どうだろうな。才能を持つてるのは確かだとは思うが、俺とは少し違うな。」

ウーリ「ふーん。で、名前は？」

コウライ『サイヤ』「つてんだ。」

ウーリ「サイヤかあ、早く鍛え上げねえとな！頑張れよ親父！」

しばらくくくだらない話で盛り上がっていたが、急にウーリが立ち止まった。

そして視線の先には誰かが倒れていて、ピクリとも動かない。

ウーリ「なんだ？？死んでんのか？」

コウライ「みたいだな…。ん？こいつ、ジベじゃねえか？」

ウーリ「本当だな、こいつはジベだ。なんでこんな所に？恐竜にでもやられたのか？」

コウライ「いや、いくら弱虫のジベでもそんな奴に殺されるなんて考えにくい。まさかあのウチユウ…？」

ウーリ「それは無いだろ、だってあいつ弱っちかったぞ？」

普段から人の死に対して感情を抱く事はない。

ジベとは同じ村出身だが、あまり共通点はないし、連む仲でも無い。が、何故だか2人はスツキリしない気持ちでいた。

ウーリ「こいつも、ガキがいたよな。何つー名前だったか忘れたけどよ。」

コウライ「ああ、聞くとところによると母親もいねえんだとよ。この様子だと、こいつのガキもしかしたら…。」

ウーリ「…。俺達がここに来て、こいつと出会ったのも何かの縁だ。埋めてやろう。」

ジベの亡骸を埋葬し、また2人は進み出した。

後味が良くないせい口数も減っている。

何時間歩いただろうか。

2人は前にイカパス人達を見つけた崖の上に着いた。

ウーリ「おい、見てみる。奴らがいるぞ。」

コウライ「ああ、見えてる。」

崖の上からはイカパス人達が居を構えている洞窟が見える。

ウーリ「あいつらいつからここに住んでやがんだ？」

コウライ「さあな…。しかも俺達よりもよっぽど立派な家だぜ。…ん？おい、あれを見てみる！」

コウライが話の途中で何かに気付き、指を刺した。

視線の先には鎖に繋がれ、グツタリした様子のサダラ人の子供がいる。

ウーリ「おい…あれって…。」

コウライ「…ジベんとこのガキだ。捕まってやがる。」

ウーリ「どうする？助けるか？」

コウライ「ふ、俺達はこんな危機的な状況程燃えあがる種族だろ？助けてやってもいいが、まずは手始めに奴らの仲間を1匹捕まえて、腹ごしらえと行こうぜ。」

その感情は仲間が捕まっている事から来る怒りなのか、自分にも子供がいて、我が子とジベの子を照らし合わせて抱いた同情か、それとも単にワクワクしているだけなのか

それはコウライ自身にもわからなかった。

衝突

ウーリ「おい見てみる。1人外に出て来たぞ。あいつにしようぜ。」
質より量のサダラ人の品定めの方法は、ただ目の前にいたから。
崖の上から勢いよく飛び降りた2人。

ウーリが飛び降りた勢いのままイカパス人の後頭部を片手で掴み
そのまま地面に叩きつける。

グシヤリ。

嫌な音をたてたまま、その場から起き上がらない。

コウライは生きているのか、死んでいるのかも確認せず
肩に担いで、急いで身を潜めた。

ウーリ「やつぱり弱っちな。ま、俺はこいつの肉あんまし好き
じゃねえからお前が食べるよ。」

コウライ「もちろんだ。いやあハラ減ってハラ減って、死んじまい
そうだったぜ！」

イカパス人達の洞窟から少し離れた茂みで食事をしているコウライ
イ達、
離れてはいるが、洞窟の入り口が良く見える位置にいる。

ウーリ「あのジベのガキどうするよ？ササツと助けるか？」

コウライ「いや、それは少し待て。中にどんな奴がいるかもわから
ねえ。次の満月はいつかわかるか？」

ウーリ「確か今夜だったと思うぜ？」

コウライ「よし、なら日が沈む前に突入して、もしもヤバくなった
ら外に出て暴れようぜ。」

少しの間仮眠を取る事にした2人だが、しばらくして

イカパス人達の騒ぎ声で目を覚ました。

どうやら、先程食ってしまったイカパス人を探している様子だ。

イカパス「おい！みんな来てくれ！ここを見てみる、地面に血がつ
いてる！」

そこはウーリがイカパス人の頭を叩き付けた場所。
何事かと、騒ぎを聞きつけて

クラアとケーンが姿を見せた。

コウライ「おいウーリ、あの2人を見てみる。あいつらだけ他のウ
チユウと微妙に違うぞ。」

ウーリ「ああ、なんだか強そうなやつらだな！」

クラア「皆洞窟の中に入っている、これは恐らく我々の仲間が何者
かに襲われた跡だ。そしてこの血痕、まだ新しい。近くに潜んでいる
かもしれない。」

イカパスの人々はクラアの言葉を聞いて急ぎ洞窟の中に帰って
行った。

周りに誰もいない事を確認してクラアがケーンに話かけた。

クラア「弟よ、なんとなく気付いてはいるだろうがこれは恐らくあ
の猿どもだ。」

ケーン「ああ、だろうな。あのガキを連れ戻しに来やがったのか？」
そう言つて視線を洞窟の方に向けた。

さつきまでグツタリしていた様子のジベの息子ベジータは、意識を
取り戻しこちらを睨みつけている。

クラア「おっと、そう怖い顔をするな、若きサダラの戦士よ。もし
かしたらお仲間が貴様を連れ戻しに来たかもしれないぞ？」

ベジータ「…。そんな訳あるか、俺達種族は他人の命なんかに興味
がねえんだ。」

ウーリ「ジベのガキが目を覚ましたみてえだな、何か話してるぞ。」

コウライ「ああ…、そんな事より俺は早くあの2人と戦いてえ。」

コウライはその本能に刻まれた、強い奴と戦いたい、という欲求が
前面に押し出て来ようとしている。

コウライ「…周りの奴らはみんな帰って行った。今日の前にいるの
はあの2人だけだ、行こうぜウーリ！」

ウーリ「しゃーねえな、ワクワクしてんのは俺も一緒だぜ！行くぞッ！」

茂みに隠れていた2人のサダラ人は
狂気とも言える程の笑みを浮かべながら茂みを飛び出した。

ケーン「!!アニキツ！サダラ人だ!!!」

クラア「ふ、ようやく姿を見せたか猿共。」

ベジータ「:!!あれは、コウライとウーリ:なんでここに!」

ウーリ「おいコウライ。お前どっちのウチユウに行く?」

コウライ「強そうなデケエ方の奴がいい。」

ウーリは一瞬舌打ちしたが、実力はコウライの方が上
仕方なくイカパス人の余った方を選んだ。

コウライが選んだのはケーン。

ケーンの方が兄のクラアよりは体格がガツシリしている。

何かを問いかけるといふ訳でもなく、いきなりクラアとケーンへ向
けて
突っ込んで行ったコウライと、ウーリ。

クラア「おい、ちよつと落ち着けよ野蛮な猿共。名前ぐらい名乗つ
たらどうだ?」

走りながらウーリが答える。

ウーリ「これから死ぬ奴に名前を教えてどうなる!」

コウライは嬉しそうな笑顔を浮かべたまま、ケーンの頬目掛けて鋭
い拳を放ったがケーンはそれを片手で受け止めた。

ケーン「死ぬのはめえら猿どもだ!」

そしてウーリもクラアの腹部へ強烈な蹴りを見舞ったが、クラアは
腕を組んだままスリリと回避。

クラア「ふ:。まあ貴様らのくだらん名前なんぞハナからどうでも

よいがな…。」

コウライ「お前らのくだらんお喋りが最後の言葉にならねえように、せいぜい気をつけるんだな。さあ始めようぜ。」

低燃費

ケーン「おいエテ公、なかなかいいパンチを持つてるな。」
そう言うのとケーンは、コウライの拳を掴んだまま

腹部目掛けて蹴りを食らわせた。

コウライ「ガフツ!!」

強烈な蹴りはコウライを一瞬地面から浮かせ、すぐさまもう片方の拳を

コウライの頬に食らわせる。

数メートル吹き飛ばされたコウライを見て、ウーリは笑っている。

ウーリ「はっは！油断するからだよ、マヌケえ！」

クラア「なら、よそ見をしている貴様は大マヌケだな。」

まだ腕組みをしているクラアは上半身を後ろへ仰け反らせ、

ウーリ目掛けて頭突きを見舞った。

ウーリ「うげえっ!!」

クラアの頭突きは重くて、早い

ウーリは一瞬足の力が抜け、軽い脳震とうを起こして地面に両手を
ついた。

四つん這いの状態のウーリを、サッカーボールキックでコウライの
方まで飛ばした。

一時的ではあるが、脳と腹にダメージを負ったウーリは

その場で嘔吐し、顔色も悪い。

コウライ「へっ、情けねえなウーリ。ゲロってんじやねえよ。」

ウーリ「う、うるせえ…。あいつ結構ヤバいぞ…。」

コウライは腕で口を拭い立ち上がり、またケーン向けて走り出し
た。

ケーン「まだ挑むのか？脳ミソまで猿だなあ!!」

しかし、コウライは口角を一瞬吊り上げ

さつきまでとは段違いのスピードで、射程距離を詰めた。

ケーン「なっ！はやっ

全て言い終わる前にコウライの右の拳は、ケーンのみぞおちにめり

込んでいる。

そして素早く拳を戻し、今度は左の拳で頬目掛け渾身の一撃を食らわせた。

ケーンはそのまま吹き飛ばされ、木にぶつかって地面に落ちた。ピクツピクツと痙攣したまま起き上がらない。

クラア「ほう、我が弟をたつたの2発で沈めるとは、ただの猿では無いようだな。」

ここでようやくクラアは腕を解き、骨を鳴らしながらストレッチを始めた。

ウーリはまだ気分が悪そうだが、スツと立ち上がり両手で頬を叩き気合いを入れた。

コウライ「おいウーリ、まだお前やれんのか？なんなら変わってやろうか？」

ウーリ「へっ、余計なお世話だ。お前は黙って見てやがれ。」

クラア「まだ貴様が俺に挑むのか？今ので実力の差はわかり切ったと思うが。」

コウライはドシッと腰を下ろし、携帯していたイカパス人の肉片を食べ始め

ウーリは今度は構えを取った。

構えを取ったウーリを見て、

今度こそクラアも構えに入り、笑みを浮かべている。

辺りは静寂に包み込まれ、両者の呼吸音すら聞こえてくる。

バキツ

!!?

張り詰めた空気を何かが破壊された音で、緊張が解かれた。

3人は一斉に同じ場所を見る。

クラア「…っ!!しまった!!今日は満月かつ!!」

コウライ「なんだと、あのガキ！化け始めてるぞ!!」
ウーリ「どこに月があるんだ!？」

月に背を向けていたコウライと、ウーリは気が付かなかった。
洞窟の入り口からクラアの背を見ていたベジータには、ハツキリと満月の姿が見えていた。

この危機から脱するのに最善の策である大猿化。

しかしコウライと、ウーリが驚いたのはそこではない。

ベジータ「ウウウウウ：ユ、ユルサ：ナイ：」

サドラ人は、大猿化する事で体内のリミッターが解除され、戦闘力も飛躍的に上昇する。

そして、好戦的な意欲だけが脳に残り、理性を失ってしまい暴れるだけ暴れ、エネルギーの消費までも桁違いに大きくなるといふデメリットも存在する。

その為大猿化が終わった際、極度の空腹と疲労に襲われる。彼らにとって空腹とは死活問題である。

しかし、本当に稀だが

理性を保つ事が出来る個体がいる。

コウライ「あのガキ、理性を保ってやがる!!」

ウーリ「ああ、何て奴だ。おい、俺達も化けちまう前にズラかろうぜ?」

クラアは何故逃げるんだ？大猿化すれば俺を倒せたかもしれないのに、と疑問に思ったが

こちらにとっても都合な為すぐに姿をくらました。

ベジータは一度空に向かって咆哮を上げ

森の中に走って行った。

親子

コウライとウーリが退却したのには理由がある。

当初の予定では、いざとなったら大猿化。だったはず

大猿化する事によって著しい体力の消耗と、極度の空腹に襲われ酷い場合、変身が解けた時に動けないというリスクもある。

ほとんどのサダラ人は、理性を保つ事が出来ない為に

極力大猿化するのを避けている。

しかし、2人は目の前の戦闘よりも

ベジータへの興味が勝った。

しばらく追跡した後、2人は立ち止まった。

まだ幼い体のベジータには、大猿の体のまま長時間動き回るのにはかなりの負荷がかかる

息を切らして座り込んでいる。

コウライ「おいガキ！お前どうやって理性を保ってやがる！」

2人の追跡者がいる事に気が付いていなかったベジータは、一瞬驚いた顔をしたが無視を決め込んだ。

ウーリ「黙ってねえでよ、何とか言ったらどうだ？」

ベジータ「…。オ、マエ、タチ、ナニ、シニ、キタ…。」

コウライ「何しに来たって、さつきも言っただろ？どうやって理性を保ってんだって聞いてんだ。お前そのまま大猿の姿のまま一夜を明かす気か？ガキの体じゃ朝まで持たねえぞ？変身解いてやるから背中向ける。」

ベジータ「ヘツ？…トケル、ノカ？」

ベジータは知らなかった。

サダラ人の子供の体は、大猿の姿を維持する為に必要な体力を持ち合わせていない為に

命を落とすケースがあり、

満月の日は親が子を外に出さないように管理する必要がある。

万が一大猿化してしまった場合、親は子の尻尾を数十秒の間掴み弱体化させる、弱体化する事によって変身は解かれ

元の姿に戻る。

ウーリ「どうやらジベの野朗は教えてやってなかったんだな、親のクセに。」

元の姿に戻ったベジータはキョトンとした顔で2人を見ていた。

コウライ「お前、何つー名前だ？」

ベジータ「…ベジータだ。」

ウーリ「たいそうな名前だな、ベジータ。はっはっはっ」

ムツとした顔をしたベジータだが、自分が置かれた状況を思い出しハツと我に返った。

ベジータ「…父さん。」

コウライ「ああ、…ジベの野朗は死んだ。俺達が見つけた時にはもう死んでいた。」

唇を噛んだベジータだが、その目は父の死を悲しんだ目では無く何かを見据えた目だった。

ベジータ「…俺はもつと強くなってやる。父さんは弱かったんだ。それだけだ。」

ウーリ「おっ！良く言ったな。それでこそ我ら戦闘民族の子だ。」

コウライ「ちっ、うちのガキにも見習って欲しいぜ。ところでベジータ、お前これからどうするんだ？身寄りもねえんだろ？良かったら俺が鍛えてやんぜ、うちのガキのいい刺激にもなるしな。」

コウライは将来ベジータが立派な戦士となり、己いつか戦いたいという欲望から

突拍子も無い提案をした。

ウーリと、ベジータは目を丸くしてコウライを見たが本気の目をしている。

そして、自分が強くなれるなら、とベジータも快諾した。

ウーリ「やっぱりお前は変わってるよ、変わり者のサダラ人って奴だな！」

この日からベジータ少年の人生は大きく変わって行く事になる。

その頃イカパス人達の拠点では。

クラア「皆の者聞いてくれ、我々のこの慣れ親しんだ洞窟とは今日でおさらばだ。あの猿どもにこの場所が見つかってしまった。皆急いで身支度を済ませ、新たな"家"を探しに行こう。」

クラアはそう言い残り自室へと戻った。

クラア「クツクツク、今に見ておれ、サダラの猿どもよ。兵士を育て上げ、兵力の底上げをしたあかつきには、貴様ら猿どもを根絶やしにしてやる。俺がこの星を支配してやる。」

ケーン「…アニキ。俺を忘れてねえか…。」

ケーンの虚しい呟きは誰の耳にも届かず、また気を失った。

奈落

あらっ？

初めまして、えつと…お名前は？

赤ん坊を抱いて部屋から出てきた女性のサダラ人に一瞬戸惑ったベジータ。

ベジータ「…べ、ベジータ、だ。」

コウライ「なんだお前、赤い顔しやがって。照れてんのか？」

ベジータ「ち、違う！ちよつと…熱い、だけだ。」

コウライ「ふん、まあいい。こいつは俺のヨメさんのビスナだ。で、そのちっこいガキがサイヤだ。見ての通りビスナは何っ？か、おしとやかな奴でよ、戦うのが嫌いみてーなんだ。」

コウライ曰く、サイヤはとても大人しい性格で

産まれた時も産声を上げる事はなかったらしい。

母親に似過ぎたせいとか、穏やかすぎる性格に頭を抱えていると言っていた。

コウライ「つー訳でよ、サイヤを立派な戦士にする為にも、お前を連れて帰って来たって訳だ！」

ビスナ「そーなの？危なつかしい事ばかりしないでね？ベジータちゃんも気をつけるのよ？」

ベジータ「べ、ベジータ、ちゃん!？」

コウライ「いいじゃねえーか、ベジータちゃん！今日はもうゆっくり休めよベジータちゃん。」

その後舌打ちしてふてくされたベジータだったが、

あまりの疲労と、眠気で黙って従う事にした。

ちなみにその時、

変な髪型と、尻を突き出した変なポーズをしたマッチョな男に

ベジータちゃん呼ばわりされ、コテンパンにされた夢を見た事は誰にも言えなかった。

コウライの元に来てから数日が過ぎたある日。

いつまでたっても鍛えてくれないコウライに少し苛立っていたベジータ。

ベジータ「いつになつたら俺を鍛えてくれるんだよ、毎日サイヤの子守ばかりさせやがって。」

コウライ「いつになつたらって、昨日も狩りに行ってデケエクマしとめたじゃねえか、お前。立派なもんだぜ、俺がガキの頃はクマどころか、イノシシすら倒せなかつたぜ？」

ベジータ「あんなもん鍛えたうちに入るかよ。俺は強くなりてえんだ。それにあのウチュウって奴らもどーなつたんだよ。」

コウライ「ああ、奴らか。お前を連れて帰つた次の日、ウーリと見に行つたんだが、もぬけの殻だつたぜ。」

ベジータ「な！何で教えてくれなかつたんだ！」

コウライ「ギャーギャーうるせえガキだな。教えてやろうと思つたけどよ、ずっと寝てて起こそうにも起きねえんだからしょうがねえだろ。」

あまりにもベジータがグズグズ言うので、面倒くさくなつたコウライは

『クラナの谷』の話を持ち出した。

クラナの谷は、とてつもない高さの谷で

谷底には奇妙な生物や、恐ろしい生物がワンサカいる場所。

サダラ人の成人の儀式として谷に突き落とされ、這い上がつて来なければ死を意味する。

ベジータ「クラナの谷って…俺はまだ5歳だぞ！」

コウライ「なんだ？びびつてんのか？ベジータちゃん、これで生きて帰つて来れなきやお前はその程度の男。だが、帰つてこれた時は今より格段に強くなつてるだろうな。」

ベジータは一瞬黙つたが、強さへの執着と、コウライに煽られた事に少しムキになつて

意を決した。

コウライ「よし、なら早速行こうぜ。ここからだ結構歩くからな。」

すぐに家を出たが、クラナの谷に辿り着いた頃にはもう辺りは闇に包まれていた。

コウライ「久しぶりに来たな。ちなみに俺は這い上がって来るまで2か月かかった。ウーリは3か月だ。ガキのお前はそうだな、1年つてどこか？」

ベジータ「い、1年!?…クソつたれ!やってやる!」

ベジータの生唾を飲み込む音は中々の音量で

とてつもない緊張がうかがえる。

コウライは何かを思い出したかのように、ベジータに後ろを向かせた。

ベジータ「うぎつ!!!いっつっつてええええ!!!」

コウライ「一応念のためにこいつはチギツておく。心配すんなまたしばらくしたら生えてくる。」

コウライはベジータの尻尾を引きちぎって、谷底に放り投げた。

ベジータ「いきなり引きちぎりやがって!いってえ…。ああ…俺の尻尾が…。」

谷底に消えていく尻尾を見てえらく落胆していたベジータだったが、

コウライは大笑いしながら

何の前触れも無くベジータの尻を蹴った。

ベジータ「え…………?」

うわあああああ!

ああああ…

あああ…

ああ…

コウライ「言い忘れたけどよー！あ、もう見えねえ、ま、いつか。」
こうしてベジータの地獄めぐりが始まる。

修行

ベジータ「うう…、クソつたれ…あの野郎…。」

かなりの高さから落下したベジータ

屈強な肉体を持つサドラ人といえど彼はまだ5歳。

相当なダメージを負って悶えていた。

だが、動けないほどのダメージではなく

ヨロヨロと立ち上がって辺りを見渡した。

近くを川が流れ、周りは鬱蒼とした密林

上を見れば濃い霧がかかっている。

ベジータ「ちくしよう、どこから這い上がったらいんだよ。暗くて
良くみえないし…。それに…。」

グウウウウ…

ベジータ「腹減ったあ…。」

家を出てから何も口にしてないベジータは、空腹を満たそうと

近くの川に向かった。

川に来たのはいいものの、水を飲むくらいで魚を捕まえる事も出来
ず

ただ呆然と座っていた。

しばらく川を見つめていたベジータだったが、ガサガサという不審
な物音に気付き

息を潜めてジッと辺りを見渡した。

ベジータ「へっ！やっとな腹が満たせるぞ！なんだ？クマか？イノ
シシか？さあ来やがれ！」

やっこの思いで食事にありつけると胸を踊らせて身構えていたベ
ジータだったが、目の前に現れたのは

3メートルはある巨大なミミズ。

キチキチ：キチキチ…と、奇妙で不気味な音を口から発しながら
ニヨロニヨロとベジータに近づいてくる。

ベジータ「う…！なんだあのデカさは!? 気持ちわり… 食えんのかな…?」

戸惑いこそあったが、空腹に耐え切れずベジータは大ミミズを獲物として認識した。

そう決めたベジータの行動は早かった。

大ミミズの頭と思われる箇所を手刀で切断し、ゴロンと転がり落ちた頭をグシヤリと踏みつぶした。

ベジータ「うえ〜っ… ブヨブヨしてやがるぜ…。 やっぱ気持ちわりい〜…。」

頭を切断された大ミミズは、体をグネグネと動かしていたがしばらくすると完全に動きを止めた。

ベジータ「…クソつたれ。こんなところで死ぬ訳にはいかねえ… 食つてやる!」

昔父のジベに教わった火の起こし方を思い出し

手際良く火を起こし、大ミミズの肉片を木の枝に突き刺して炙りだした。

こんがりと焼けた大ミミズの肉片は、緑色の肉汁を滴らせて香ばしい匂いを漂わせている。

が、見た目がやはりグロテスク。

よし! 食うぞ!

今食うぞ!

よし! … いや。

いや!! 食う!

うん! 食うぞ!!

……。 いやあ… やっぱり…。

そう独り言を呟いて、かなり葛藤していたが意を決して口に含んだ。

ベジータ「ん? ふがふがふへふは! (ん? なかなかいけるな!)」

決して美味とはまでは行かないが、全然食べれる。そう思ったベジータは大ミミズを丸ごと焼き上げペロリと平らげた。

ベジータ「ふう〜！食った食った!!腹八分つてとこかな！腹も満たせた事だし、今日はもう寝よう。」

食事を済ませたベジータは、太い木の根元にもたれかかり目を詰むった。

満腹感と、疲労で猛烈な眠気に襲われすぐに深い眠りに落ちた。

翌日ベジータは妙な気配に気付き目を覚ました。

キチキチ：

キチキチ：

ベジータ「おうふつー！ビックリさせやがって!!最悪の目覚めだぜクソつたれ!!」

ベジータの目の前に昨日の晩に出くわした大ミミズよりも、さらに巨大なミミズが今にもベジータを丸呑みしようとして大きく口を開けていた。

ベジータ「気持ち悪い奴め!!死にやがれえ!!」

ベジータは昨日と同じく大ミミズの頭を手刀で切断しようとしたが、

昨日のミミズよりも硬く弾き返された。

ベジータ「なっ！なんだとっ！」

一瞬戸惑い固まったが、すぐに気持ちを切り替えて今度は渾身の蹴りをお見舞いした。

5歳児とはいえサダラ人の蹴りは相当な威力を持っている為、大ミミズは泡を吐きながら倒れ、ピクピクと痙攣している。

ベジータ「よし！朝飯探しの手間が省けたぜ！」

そうやってベジータは頭を踏み潰し、大ミミズの体を細切れにしていたが、

ちょうど半分くらいのところで
妙な膨らみがあるのに気付いた。

ベジータ「ま……まさか！こいつつ！幼虫がいるのか!?うええく
…」

急に食欲が失せてきたベジータは

別の獲物を探そうと大ミミズから離れようとした、その時。

グボツ!!

ベジータ「うぎやあああああ!!」

大ミミズの腹を突き破って奇妙な生物が姿を現した。

緑色でシワシワの肌、尖った耳、ギョロつとした大きな目、微かに
生えた頭髮に、小さな体。

?「うひょく、やつと出られたわい。なんじゃ?お主がこの大ミミ
ズを退治したのか?ワシとした事が、寝ておる隙に大ミミズに食われ
てしまうての。いやあ助かったわい。」

ベジータ「な、な、な、なんだ貴様つ!ミミズの幼虫かつ!?いや、幼
虫にしちやヨボヨボ過ぎるな…。えーい!この際何でもいい!何者
だ、ミミズじじい!!」

?「ミミズ…じじい…じゃと?

ワシは女じゃあああああ
!!!!

ベジータ「えええええ!!?」

ファースの力

謎の老婆？に大ゲンコツを喰らい、意識朦朧としているベジータ。
？「この戯け者が！これじゃからエテ公共は嫌いじゃ。マナーは悪い、話は聞かん、食う事と闘う事でしか生きられん下等な種族。」

ベジータ「てめえ…、助けてもらっておいて大ゲンコツかました上に悪態までつきやがるとは、なんて品の無い野朗なんだ！」

？「野朗では無いと言うとろろが!!…ん？お主、尾はどうした。もしやエテ公では無いのか？」

ベジータ「ここへ落とされる前に引っこ抜かれたんだよ！それよりもてめえいつたい何者なんだよ！」

？「なんと、不憫なエテ公じやの。」

そしてよくぞ聞いてくれた！ワシに質問したエテ公はお主が初めてじゃ。知恵も尾も無いが、他のエテ公よりはちよつとばかしマシな奴じゃ。

ワシはマスター・ヤード。とつてもとーつても偉いジャダイなんじゃ！

ついでに、大ミミズから救ってもらったお礼じゃ、ほれっ！」

ヤードの手から光の球体が現れ、ベジータを包み込んだ。

すぐに光は消え去ったが、コウライに引き抜かれたはずの尻尾が元通りになっていた。

ベジータ「なっ!?何をしやがった!!何で尻尾が生えてるんだ！」

ヤード「フォツフォツフォツ、ファースの力じやよ。ファースの力は無限大、森羅万象と一体になればその程度の事は容易い。ま、何でもかんでも出来る訳じゃあないがの。」

ベジータ「訳の分からない事をぬかしやがって！この胡散臭いバアめ！」

ヤード「ほんと可愛く無いのお。せーっかくこのファースの力をお主に授けてやろうと思うとつたのに。やめじややめじや！」

ベジータ「なっ…！くっ…ま、まあいい。俺はそんな事出来なくてもいい!!強くなってこんな所からすぐに抜け出してやるぜ!!!」

そう言つてベジータはこの場から立ち去ろうと振り返つて歩きだした。

しかし、やはり多少の興味がありヤードの方をチラツと振り返つた。

なっ!?

ベジータの視界に映っていたのは、ドヤ顔を決め込んで宙に浮いているヤードの姿だった。

ヤード「色んなエテ公共にこのファースの力を、使い方を教えてやろうと思うておつたが

ヤツら人の話をひとつも聞きやせん!」

腕を組んだまま宙に浮いているヤードは不満げにベジータに言った。

しかし、目の前の出来事を理解する事に必死だったベジータの耳には何も届いていない。

ベジータ「な、な、な、なんだ貴様っ!!それは一体どうやってやる!!!」

ヤード「すごいじゃろ?カッコいいじゃろ?」

これがファースの力じゃ、お前たちエテ公共はこのワシの凄さをちくつともわかつとりやせん!」

ベジータ「さっさと教えやがれえ!!」

生意気な態度に少しムツとした様子を見せたが、宙に浮いたままのヤードはベジータにこう言った。

ヤード「教えてやっても良いが、条件がある。」

ベジータ「何を言つてやがる、貴様が教えたがつてたんじやないか。」

それもその筈。

かつてヤードは、

故郷スカイランナー星のジャダイと呼ばれる騎士団の長、ジャダイマスターだった。

ジャダイは宇宙のバランスを保っていた存在であり、平和の象徴。しかしファースの力を悪用した暗黒帝王ダースベイとの戦いに敗れたジャダイはヤードを残し全滅。

そして命からがら逃げついたこの惑星で、

300年もの間身を潜め待っていた。

新たなジャダイの誕生を。

そこへ運良く出会えたのがベジータだった。

ヤード「ダースベイはまだ生きておる。今もなおワシの事を探しておる。じゃがワシはもうこんなにならぬに老いてしもうた。ファースの力も若い頃に比べてはるかに弱い。」

そこで小僧、このファースの力を授けてやる代わりに暗黒帝王ダースベイを倒してくれ！」

ベジータはフンツと鼻で笑った。

ベジータ「面白い！そのファースの力つてのを習得してやる、腕試しにもなるかわわからんが、このベジータ様がダースベイとやらを消し去ってやるぜ。」

フハハハハ!!!と高笑いしたベジータ(5)の笑い声はクラナの谷に響き渡った。

三銃士

よく動き よく学び よく遊び よく食べて よく休む。
ベジータはメキメキと頭角を現して来ていた。

ウーリ「よう、ベジータの野朗かれこれ半年くらいになるけどもう死んでやがったりしてなあ！」

コウライ「さあな、死んじまつてたらそれまでよ。それもだが、うちのガキもそろそろ狩りに連れてってやりてえんだが、ビスナの野朗が絶対ダメだって言いやがる。このままじゃただの泣き虫サイヤになっちまうぜ。」

意外にも子煩悩なコウライを不思議そうな目で見ていたウーリ。

コウライ「なあ、そういえばあのウチユウ：ってやつらいつたいどこ行っちゃまったんだろうな。姿もだが、痕跡すら見当たらねえ。」

ウーリ「あー。そういえば隣村のホレソって奴が変な奴がいたって言うってたらしいぜ。」

コウライ「なんだと!?!何でそれを早く言わねえんだよ!!さっさとそのホレソって奴のどこに行くぞ!」

ここ最近イカパス星人の姿を見る事が無く、暇を持て余していたコウライは目を輝かせながらすぐに身支度を始めた。

数ヶ月前の

とある森の奥深くにある溪谷。

「ダイオウ様！成人の儀の準備が整いました。今回成人になる我々の子供達は全部で15名。みなダイオウ様に会いたがっております。」

クラア「そうかわかった。全員をここへ連れて来い。」
イカパスの王、クラアは玉座に腰を落としたまま静かに言った。
程なくして15名のイカパスの若者が王の前に並んだ。
イカパスの成人の儀は、戦闘タイプかそうでないかの選別で
やり方は至ってシンプル。

王である者の血を一口舐め体色が血の色に変われば、ノーマルタイプ。

何も変化が無かった者が戦闘タイプのイカパス人。

クラア「さあ、若き我らの子よ。我が血を力に変えよ。」

盃のような物にクラアの血が垂らされ、それを順に回していく。

効果はすぐに現れ1人、また1人体色が変わっていく。

それもその筈で、戦闘タイプのイカパス人は3〜4年に1人いるか
いないかの希少性。

クラアとケーンの誕生パターンは本当に稀な出来事だった。

クラア「前に戦士が誕生したのは確か2年程前だったか。今回あまり期待は出来ないな。」

あああああ!!!

うおおおおお!!!

うがああああ!!!

唐突に3人の若者が声を荒げた。

ぼたぼたと汗を垂らし、息が荒くなっている。

骨が軋むような異様な音と共に、次第にたくましい体へと変化して
いき、明らかにさつきまでの華奢な体の若者とは別人に変わった。

クラア「なんと！素晴らしい!!こんな短期間で新たな戦士が生まれるとは！

それも3人!!3人共ご苦労、名を名乗れ。」

3人は息を整えた後

それぞれ

アオリ、モンゴ、ケンサキと名乗った。

アオリ「ダイオウ様…、この命尽きるまで、貴方様に尽くします。」
モンゴ「俺も同じだ。」

ケンサキ「ああ。」

クラア「頼もしい限りだ。さっそく鍛えあげてやりたいところだが、今は皆が待っている。皆に姿を見せてやれ。」

すぐに民衆の群がる広場に連れて行かれ、その姿を晒した時民は大いに喜びあつた。

新たな戦士の誕生にイカパスの民は皆で盛大に祝い、この星で生き抜いて行く為の新たな希望を見つけ出した。

しかし、その平和はほんの束の間の出来事だった。

ホレソ「なんだあいつら、あんなヤツらこんなところにいたか？
なあどうする？ちよつとちよつかい出してみるか？」

「ん、ああ…なんでも…いいぞ、オレは…。」

ホレソ「おいおい、やっぱりお前はヤル気ねえなあ。」

闘いにならないとノらないのかよお前はよお。

なあおい、聞いてんのか？

ヤモシよお。」

最悪

ヤモシ「腹減ったし…ちよつと行ってくる…。」

あぐらをかいて座っていたこの大男はそう言つて立ち上がった。

彼の名はヤモシ、筋肉こそあまり大きいとは言えない体だが、

平均身長160cm代のサダラ人の中でも群を抜いて大きく、2mは超えている。

小高い丘の上からイカパス人の集会を眺めていたヤモシは、

ノソノソと気怠そうに下つて行き出した。

ホレソ「おい、ちよつと待てよ！俺も行くぜえ〜！何人狩れるか勝負しようぜ！」

「お、おい。あれつて！」

群衆の中の誰かが丘の方を指差している。

声に気がついた者が一斉に丘の方を見て、再びあの日の恐怖を思い出した。

「うわああ！だ、ダイオウ様あ！！サダラが！サダラ人がこっちに向かって来ます！！」

アオリ達3人に、戦士達だけが許された伝統の刺青を彫り終えたところだった。

クラア「ほう、タイミングが良いのか悪いのかわからんな。空気の読めん猿め。」

クラアの苛立ちは一気に周りをピリつかせた。

近くで見えていたケーンに顎で指示を出す。

ケーン「久しぶりの登場だぜえ。グレードアップした俺様のウォーミングアップにまずは間抜け猿2匹のお仕置きの時間だぜ。お前達3人はそこで見ててな！」

ケーンはこの数ヶ月ひたすら鍛錬を続けていた。

達人と呼ばれる程の領域にまで達し、技、力共に数ヶ月前とは別人

のようになっていた。

サダラ人2人が村の入り口に入る寸前の所でケーンが立ちほだかる。

ケーン「おい、猿共。わざわ『ガハッ!!』」

言いかけていたところをヤモシの蹴りが腹に入る。

ホレソ「なんだお前え？ 気持ち悪いな。1番に死にてえのか？」

ヤモシ「：。お前、弱い。」

呼吸がうまく出来ず、うずくまっているケーンの頭をホレソが踏みつけようとした。

グシャ!!

つと嫌な音を立てて潰れた脳みそが辺り一面に散っている。と思っただが、

ホレソの足元にはぽっかりと穴の空いた地面があった。

寸前の所で回避したケーンは少し警戒したように距離を取った。

ケーン「てめえ：不意打ちとは陰気なヤツめ。」

ホレソ「お！お前なかなかやるなあ、よし俺が相手してやるぜえ」

ケーン「舐められたもんだぜ、まあいいまずはてめえからぶっ潰してやるぜえ！」

ホレソは完全にみくびり、過信していた事にすぐに気がつく。

勢いよく飛びかかって来た相手が、自分の想定していた以上の速さで詰めて来ていた。

まばたきをしたほんの一瞬の隙に、左頬に鋭い痛みが襲いかかり

数m？後方に吹き飛ばされていた。

砂埃の中を口を拭いながら出て来た、ホレソ。

ホレソ「はっはあゝ!! 覚悟は出来てんだろおなああゝ??ぶっ殺してやる!!」

戦闘民族の殺気は肌がピリつく程凄まじく、一気に緊張感が増す。

ドンツ!!と地面を蹴る音のした後

両者は力比べをするように手を掴み合っている。

ホレソがケーンの脇腹目掛け膝蹴りを入れようとするが、ケーンも

膝を立て防ぎ、

頭突きをホレソの顔面に食らわせた。

鈍い音と共に折れた歯が地面に落ちる。

口と鼻から血を流していたホレソは咄嗟に手で押さえ顔面が歪むその隙にふくらはぎに強烈な蹴りを入れ膝をつかせた。

この蹴りで完全に骨折し、苦悶の表情のホレソは顔色が一気に悪くなる。

興奮状態のケーンは、間髪入れずにとどめの手刀で首を切断しにかろうと勢いよく振りおろした。

が、首に当たる寸前の所で手が止まる。

止めたのではなく、止まった。

ケーンは背後から今まで感じた事のない殺気に襲われ金縛りにあつてしまう。

あまりにも凄まじ過ぎる殺気は本能に直接語りかけてきた

『死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。』

体は小刻みに震えだし、寒気がするのにならぬ汗が吹き出してきた。

目の前には満身創痍で立ち上がる事が出来ないホレソが嫌な笑い声をあげている。

ホレソ「ヒヒツ！て、てめえ…はあ、はあ。…死んだな。ちくしよ…足の骨が折れてやがる…。あばよ！やれえ!!ヤモシいい!!」

ガシイ!!

クラア「惨めな弟よ。また命拾いしたな。」

絶滅

『咄嗟に止めに入ったものの、なんだこいつ。とんでも無く危険だ。どうする…。』

ヤモシの拳はクラアの手刀で弾かれた。

弾きはしたものの、あまりのパワーに腕がジンジンと脈打っている。

強大な力の前に成す術も無く、

余裕の表情と態度を示すのに精一杯のクラア。

ケーン「あ、アニキ：すまねえ。けど、こいつはヤベエゼ…。見た事ねえ：こんなデタラメな野郎：。」

ホレソ「何やってんだヤモシ!!! さつきとやっちまえ!!!」

背後の方でホレソが叫んだ、

はっ!と我に返ったクラアは目の前の大男の顔面目掛け渾身の蹴りを放った。

バチイッ!!と音が辺りに響いたが、ヤモシは表情ひとつ変えず軽く手でクラアを突き飛ばした。

『な、なんだこの重さはっ!? 軽く押されただけじゃないのかっ!』

クラアは突き飛ばされた衝撃で数歩後退した後、尻餅をつき一気に恐怖が押し寄せてきた。

確実に勝てない。

ここは一旦引くしかない。

もう作った表情などしてられない。

早くここから立ち去らねばっ!!

焦りと絶望の感情を抱いたまま

目の前の大男を見上げたが、さつきまでいた大男はもうすでに背後に回っている。

アニツ：

後ろで何が起こったのか見なくとも分かる。

本当に一瞬の出来事だった。

ほんの一瞬の心の迷いで生まれた隙に、判断と行動が遅れたのだらう。

ゴロンと転がってきた弟の頭部は、クラアの足に当たって止まった。

クラア「」

数々の修羅場を乗り越え、どんな犠牲も払い、

家族や友の死をこの目で見してきたクラアにも、

弟の死はとてつもないダメージを与え、絶望と喪失に打ちのめされた。

戦意を削がれただだ立っているだけのイカパス人など、怪我したサダラ人でも倒せる。

ホレソ「どきやがれえ!!」

ホレソの拳はクラアの顎に的確に命中し、その場で気を失った。

ホレソ「クツクツクツク!!ざまあねえなああクソがよおく!!おいヤモシイコイツらの他の仲間たちも皆殺しにしちまえ!!」

ホレソの掛け声でヤモシは何も言わず村の中まで入って行った。

すぐに人々の悲鳴や断末魔の叫びが溪谷中に響き渡り、

イカパスの民は根絶やしにされた。

3人の若い戦士達も激しく抵抗したが

ヤモシの力にねじ伏せられ

生きてはいるものの皆声を出す事も出来ない程の重症をおつてい

る。

数日が経ち、

クラアは瓦礫に腰掛けこの惨劇を受け入れられずただ呆然と仲間
の亡骸を見ている。

ある程度活動出来るレベルにまで回復したアオリが、クラアに声を
かけた。

アオリ「ダイオウ様、生存者は我々3人とダイオウ様の4人だけ
です。事実上の：絶滅になります。」

クラア「ああ：。」

モンゴ「あのおダイオウ様、俺達もうここにずっといてもしょうが
ねえと思うんだけどよお、違うところにかねえか？」

モンゴの空気の読めない発言にアオリが舌打ちしながら睨んだ。

モンゴ「こえー顔すんなってアオリ。お前だってあの化物に太刀打
ちできねえ事くらい十分わかってるだろう？だったらさっさとこんな
星捨ててもっと住みやすい星に移住しようぜ？」

ケンサキ「何を言っているんだお前は。どうやってこの星から出て
いくのだ。お前もあのサダラの猿と同じ脳みそになったのか？」

モンゴ「ん？どうやってって船だよ。ほら見てみるあれ、船じゃ
ねえのか？」

モンゴが指差した先にあったのは

山の頂上付近にある謎の物体。

苔等の植物に覆われて今まで誰も気がつかなかった。

アオリ「間違い無いのか？なぜ船だとわかる。」

モンゴ「ああ、この星に来る前に立ち寄った

『コリオ星』って星があったら？」

そこのコリオ星人のガキが自慢気に俺に言ってきたんだよ。

確か『チルド』って名前のガキだったな。」

チルド『おい、そこのお前！これがなんだかわかるか？

わからないだろうなあ〜！ホーツホーツホー！

教えてやるよ！これは僕のパパが誕生日プレゼントにくれた、

『ナメック星人』の船なんだ！』

モンゴ『え？ああ、そうなのか！かっけえなあ!!』

チルド『そうだろう？僕はいつか宇宙海賊になるのが夢なんだ！これは僕にとつてオモチヤみたいなものだね。いつかお前達も仲間にしてやってもいいぞ！ホーツホーツホーツホー!!』

モンゴ「つつー訳なんだ。」

ケンサキ「なんと、そうだったのか。何という幸運。」

アオリ「ダイオウ様、どちらにせよここに居ては危険です。いつまたあのサダラ人が襲ってくるかもわかりません。さあ、まずはあのナメック星人とやらの船まで行ってみましょう。」

アオリの言葉に返事はしなかったが

クラアの心の中では段々と絶望から怒りへと変わりかけていた。

絶対に許さんぞ、一度この星を出るが

必ず戻って復讐してやる。

待っているサダラ人め。

家畜泥棒

そして現在。

ここはコウライ達の故郷、「ノーエン村」
から北へ歩きで2日程かかる場所にある【タハタ村】

コウライ「2日もかかってやっと着いたぜ。」

ウーリ「ああ、早速奴を探そう。小さな村だからすぐに見つかるだろう。」

ここに来る途中で捕まえた牛を食べながら練り歩く2人は

1人の女サダラ人に声をかけられた。

「ねえあんた達、見ない顔だね。どこから来たのさ。」

ウーリ「ん、ノーエン村から来たんだ。ところでお前ホレソって知ってるか?」

「ホレソ? ハツタリのホレソかい? 奴ならさつきヤモシの野朗と川で何か食ってたよ。」

そう言うと女は、あっちの方向だ。と指を刺して教えてくれた。

「あんまりあんな奴らと関わらない方がいいよ。ま、アタシには関係ないけど。」

戦闘に飢えたコウライとウーリは

あの強かったウチュウの情報が少しでも欲しい為、変な奴だろうが、そんな事はどうでもいい。

お互い目を合わせ、やっと見つけたぜ!と笑顔の2人は急いで川に向かった。

川はすぐに見つかり、例の2人もそこにいた。

バリバリと音を立て骨ごと何かの生物を食べているヤモシと、ネズミを尻尾から指でつまんでぶらぶらさせてヘラヘラしているホレソ。

ホレソ「んく？なんだあ？お前ら、見ねえ顔だな。ここは俺達のシマだぜ？シツシツ、あっちへ行きな。」

ヤモシ「……………」

ウーリ「な、なんだあ？あの野朗お…嫌な奴だぜ…。」

コウライ「わ、わりい。おめえ達のシマを荒らしに来た訳じゃねんだ。ちよつと聞きたい事があってよ、ホレソ…つてのはどっちだ？」

コウライが聞くと、

ホレソが怪しみながら俺だ。と答えた。

人から嫌われ、避けられているホレソは他人に声をかけられる事が滅多に無い。

声をかけられる時は大抵何か面倒ごとだ。

ホレソ「…。なんだよ、俺に何の用だ。さつき家畜が襲われたって村の連中が騒いでたが俺じゃねえぞ？俺は人に飼われた動物は食わねえんだ、クセエからな。野生の臭いがしねえ、キレイな臭いが嫌いだからだ。」

コウライ「いや、違うんだ。聞きたい事つてのはウチユウって奴らの事なんだ。ウチユウ…えつと、なんつったかな…イカ…イカ…」

ウーリ「イカパスだ。」

ホレソ「イカパス…？…。ん？あ、あいつらの事か？初めて見た奴らだったな。そいつらがどうしたんだ？」

コウライ「知ってるんだな!?そいつら今どこにいるかわかるか？つええ奴と闘いたくてよお。闘ったのか？そいつらと！」

1人興奮気味に食いついたコウライに若干驚いた様子だったが、持っていたネズミを生きたまま貪りだし、

もう1人の大男を指差しながら、あいつが全部やつちまったよ。と

言った。

ウーリ「な、なんだと？1人でか？あの男1人でやっちゃまったのか？」

コウライ「おいおい冗談よせよ、つええ奴もいただろ？そいつらも皆やっちゃまったつてののか？」

ホレソ「ああ、だからそうだつて言ってるだろ。つええ奴と闘いてえならそのヤモシと闘ってみたらどうだ？全滅させたつてのは納得出来ると思うぜ？同時にいかに自分がちっぽけな存在かって事も受け入れないといけねえ事になるがな。」

軽く笑いながらそこで食事中の大男との闘いを勧められた。

さすがに1人でやつたつてのは信じ難いコウライとウーリは、戦闘民族らしくやはり闘つて確認する方が手っ取り早い事は理解している。

ホレソ「なあおい、ヤモシ。この客人と軽く手合わせしてやれよ。殺さねえようにちゃんと手加減してな？なんなら2人同時でもいいんじゃないか？へっへ」

ウーリ「な!!なんだと？それはいくらなんでも舐めすぎじゃねえか？逆に死んじまつても恨みっこなしだぞ？」

何も言わないヤモシがチラツと2人を見てゆつくりと立ち上がった。

想像以上の大きさに一瞬萎縮したウーリだったが、コウライの目は輝いている。

コウライ「おいお前、ヤモシつっのか？座つてると気付かなかつたが、めちやくちや強そうだな！無駄が無く、締まったい体してやがる！」

ホレソには2人同時を勧められたが、コウライはまず俺1人でやらせてくれ、とウーリに頼んだ。

ウーリは割とすんなり受け入れたが、サダラ人お決まりの『どつちが先かジャンケン』したら良かったな。とも思った。

コウライはゆつくりと構えを取り、ヤモシと向かい合ったがヤモシは棒立ちのまま見下ろしている。

先に動いたコウライの拳はヤモシの脇腹に入った。

そのまま立て続けに

左、右、左、右と連続して殴るがヤモシは表情ひとつ変えない。

止まる事無くコウライは飛び上がり、今度は顔面に蹴りを放つ。

これでもかという程の打撃を与え続けたコウライだが、それでもヤモシは全く効いた様子がない。

コウライ「はあ…はあ…。なんだこいつ…全くダメだ…なんでこんなに頑丈なんだよ…。」

ヤモシ「…。もう…動いていいか…?」

そう一言だけ発すると、その場に居た3人の目には捉える事が出来ない速さの拳がコウライの腹にメリ込む。

コウライ「うがあああああ…!!」

コウライの悲鳴に近いうめき声が辺りの鳥達を飛び立たせた。

ウーリ「な、な、なんて野郎だ…。全く見えなかった…。し、信じられねえ…:こんな奴がいたなんて…!」

コウライはたったの一撃で沈み、ウーリも心配する程のゲロを撒き散らし、鼻水と涙を流した。しばらくしたら土下座のような姿勢のまま白目を向いて気を失った。

ホレソ「お、おい。こいつ大丈夫か…?おい、お前生きてんの?まともにヤモシに殴られた奴初めて見たけど、人つてこんなにゲロ吐くんだな…。」

さすがのホレソもドン引いているレベルでダウンしたコウライ。

ヤモシは手加減したんだけどなあ。の表情をしたままぽりぽり頭をかいている。

ウーリ「とりあえず…、お前の實力はわかった…。悪いんだが、こいつ休ませるとこ連れてつてくれねえか?」

ウーリがコウライを肩に担ぎ上げてホレソに聞いた。
ホレソは付いてきな、と言ひ2人を先導して歩いた。
ヤモシ「…。お前は…いいのか？…しなくて？」

ウーリ「ばっ！バカっ！お、俺はコイツを休ませないといけねえだ
ろ？ぎ、残念だなく、やりたかつたんだけどなあ…。ま、まあ…ま
た頼むわっ。」

ヤモシ「ふーん…。そうか。」

ウーリは脇汗が今までで1番凄かつたのと、尻尾がちよつとキユツ
となつた事は誰にも言えなかつた。

接触

モンゴ「おいケンサキ、どうだ？行けそうか？」

ケンサキ「ちよつと待て、ここを…、くつ…、あとちよつと…、…、よし、出来た。」

イカパスの民が滅ぼされ、

モンゴと、ケンサキが船の修理に取り掛かりだして半年の月日が流れた。

元々高度な文明を持っていたイカパス星人は、修理こそ問題はなかったが

ナメツク語の解読に時間がかかってしまった。

ケンサキ「よし、少し動かしてみよう。ええつと…、『ピツコロ』！」

音声認識の船は『ピツコロ』という言葉で入り口が開く。

なぜかその言葉だけは上書き出来なかった。

モンゴ「なあケンサキ、この船の名前ってあるのか？」

ケンサキ「ああ、実はこつそり決めて登録してあるのだ。ふはは！

『スクイード号』だ。』

モンゴ「おお！かっけえな！」

『音声認識完了、スクイード起動。』

ナメツク星の船はとても不思議で、動力源がどこを探しても見つからない、初めて起動したがとても静かで本当に飛べるのか等謎が多い。

『目的地ヲ設定シテクダサイ。』

モンゴ「お、おい、これ本当に行けんのか？しかも目的地ってどこか知ってる惑星があるのか？」

ケンサキ「さあ…、どうだろうな。スクイード、この星から一番近い惑星は？」

ピピピと電子音のような音がした後、モニターのような部分にこの

星を中心に

近辺の様子が映し出された。

『1番近くノ惑星ハ、ココカラ8光年先ノ『惑星ナンモネー』デス。6分51秒デ到着シマス。』

ケンサキ「…どうする? モンゴ、いつちよ行ってみつか? あ…間違えた、ちよつと行ってみるか?」

モンゴ「おいおい、行かねえって選択肢あると思うかよ! 往復でだいたい15分くらいだろ? ダイオウ様も、アオリもわかりやしねえつて!」

ケンサキ「よし、ならそうと決まれば早速発進だ。スクイード! 目的地を惑星ナンモネーに設定、発進準備!」

『目的地ヲ設定シマシタ。航行モードニ切替エマス。発進準備』

スクイードは発進準備が完了した後、カウントダウンを開始した。カウントダウン終了後、ほぼ無音に近い状態で離陸し、瞬く間に宇宙空間へ飛び出し、しばらくするとスクイードが高速飛行に移行するとアナウンスした。

ケンサキ「そういえばあの星の名前なんなんだ? スクイード、出発地点の惑星の名前は分かるか?」

『出発地点ノ惑星ニ名前ハアリマセン。新規登録シマスカ?』

モンゴ「さすがこんな宇宙の辺境にある惑星だぜ。猿の惑星とかでいんじやねえのか? ガハハ!」

ケンサキ「猿の惑星…は良くないと思うぞ、色々。ん…。サダラ人の惑星だから、そのままいいんじやないか?」

惑星サダラ。これでいい。」

『惑星サダラ、登録シマシタ。』

ケンサキとモンゴは15分程の試験運行をし、惑星サダラの地に再び戻ってきた。

惑星ナンモネーは本当に何も無かったな、とモンゴが笑いながら船

から降りていると

森の中からアオリと、クラアが恐竜を引きずりながら出てきた。

アオリ「ケンサキ、その様子だと船は順調に飛ばせたみたいだな。ご苦労。」

ケンサキ「ああ、一番近くの惑星まで8光年の距離だったがおよそ7分程度で着いた。ナメツク星人というのはとてつもない技術を持っているみたいだな（怒られなかった…ふう。）」

クラア「皆、ご苦労だったぞ。これで憎き猿どもともおさらばできる。違う星へ行きお前達を鍛え直したあかつきには、再びこの地に戻り今度こそ本当に根絶やしてやる。」

クラアは歯を食いしばり拳を握り締めた。

アオリ達3人も仲間を殺された怒りは一緒に皆が復讐を誓った。

そして体制を整える為にまずはこの船の出身地、ナメツク星へと目的地を設定した。

クラア「まずはナメツク星に行き、才能のある者は仲間招き入れる。ナメツク星までは1年かかるが鍛錬は怠るな。では行くぞ。」

発進準備のアナウンスを聞きながら各自着席、ケンサキが『オーディオを付け忘れた。』と落胆し、モンゴに『そんなものいらねえよ。』と突っ込まれた。

離陸体制に移ろうとしたその時。

バキンッ!!!

ブー、ブー、ブー!!

機体破損、離陸中止、離陸中止。

機体が傾き、正面の窓から一瞬だけ見えたサダラ人。

クラア「貴様らあああああああつ
!!!!」

再会

ウーリ「おい、なんだこりやあ？こんなもん見た事ねえ。」

コウライ「見てみる！中に奴らがいるぞ!!」

ホレソ「おらっ!!」

ホレソが四つ足の白い謎のオブジェの足を一本ヤクザキツクで折った。

今から3時間ほど前。

ホレソ「ここだ。まああんまり広くねえけどよ、そこに寝かせてやれ。」

ホレソは普段ヤモシと2人で共同生活している洞穴に2人を案内した。

中にはおびただし程の骨が散乱している。

家を持たない独身のサダラ人は基本的にはこのような生活スタイルが一般的だ。

ウーリはホレソが寝ているであろう場所にコウライを寝かした。

ウーリ「おい、コウライ！いつまで伸びてんだよ、コラ！おい、雑魚！」

ウーリはそう言いながらコウライの頬をペチペチ叩いているが、未だ白目を剥いたまま起きる気配がない。

ヤモシが腹が減ったから何か取ってくる、と言い出て行き、2人は気まづくなり

ウーリはヤモシの事について質問した。

ウーリ「あのヤモシって奴、とんでもねえパワーの持ち主だな。どんな鍛え方したらあんな風になるんだ？」

ホレソ「ああ…。奴はちよつとばかり特殊でな。あのパワーは鍛えて身に付いたもんじゃねんだ。」

そう言うとホレソはヤモシの事を話だした。

ホレソとヤモシは兄弟のような関係で物心ついた時からずっと一緒にいた。

2人は孤児でヤモシは親と死別、ホレソは捨てられた。サダラ人にとって特段珍しい事ではない。

ホレソは生まれつき狂ったような性格で、サダラ人の中でも強くはなかった親は、あまりの凶悪さに手を焼き5才の息子を谷に突き落とした。

深く暗い谷底でたまに上から落ちてくる生き物を食い繋いで2年近く1人で暮らしたらしい。

その為ホレソには肉を焼くという習慣が無く、生肉しか食べない。そしてある日1人の女が落ちてきた。

瀕死の状態の彼女はホレソを見て一瞬驚いた様子を見せたが、急に喋り出した。

『…アタシのガキが、上で泣いてる。助けてやってくれないか…、あの子は特別な力を持つてる…。きつとアンタの力になってくれるよ…お願いだ…。』

そう言うと女は息絶えた。

何でテメエのガキの守りをしなきゃならねんだよ、とも思ったが刺激も何も無いこんな場所に居続けるよりは楽しそうだと思い、崖を登り出した。

2年近く谷で暮らしたのは、別にこの崖を登れないからじゃなく、上での生活に何の魅力も感じなかったのと、シンプルに面倒だったからだ。

スイスイと登っていき、頂上に近付いて来た辺りで子供の泣き声が聞こえてきた。

崖を登りきり、泣き声のする方へと足を運び茂みの中に子供の後ろ姿を見つけ声をかけた。

ホレソ「おい、ガキ。いつまで泣いてんだよ！うるせえぞ。なあおい！聞こえてんのかよ！」

ホレソは子供にかなり近づくまで気が付かなかったが、裸の状態の少年は全身血だらけで

すぐ横に大人の男が横たわっている。

ホレソ「え。お、おい！まさかお前がやった訳じゃないんだろ？何があつたんだよ!？」

何を聞いても全く応えないこの子供は、応えないのではなく、応えないのだった。

唯一喋れるのが自分の名前の『ヤモシ』という言葉のみ。

ヤモシは脳に異常があり、成長スピードも他のサダラ人と比べるとかなり遅い。

そしてサダラ人の最大の特徴と言える尻尾が生えていない。

ヤモシの両親は至って普通のサダラ人だったが、ヤモシは違った。

本来サダラの子は成長がとてつもなく早く

幼児期間がかなり短い。

幼児期間が短い代わりに子供期間が長く、

青年期、成熟期と若い期間が続く。

闘いだけに特化した進化をした。

だがこのヤモシは、ホレソとあまり歳も変わらないにもかかわらず赤ん坊のように泣いている。

何があつたかと聞いてもひたすら泣き続けるこの子供にどうしたらいいか分からず、だんだんイラついてきたホレソは少し大きめの声で

いい加減にしやがれ！もう知らねえ！と言い、その場から去ろうと振り返った。

進もうとした時、何かに足を掴まれた。

「お、おい…ガキ。俺を置いて行くんじやねえ…、このガキはやべえんだよ…、さつきと俺を助けやがれ…。」

今まで倒れていた男が目覚まし急に何か言ってきたが、

この男がどうなろうと知ったこつちやない。が、何があったのか気になり

助けてやるかわりに教えろ、と男の髪を掴んだ。

さつき、この子供と母親がいるところを見て急にムラツときて母親を襲った。

母親が襲われるのを見てこの子供は急にとんでもない化物に変わったと言った。

「始めはただヤリたかっただけだが、あの女抵抗して来やがったからイラついて半殺しにしたんだ。

そしたらこのガキ…白目剥いて襲いかかって来た…。」

尻尾もねえし、変なガキだと思つたがこいつは最悪だ…あんなとてつもない力で殴られたのは初めてだ…、な？わかつただろ？早くここから離れようぜ…！」

この男が焦りながらホレソに説明しているが、ホレソは途中から聞いていない。

さつきまで泣いていたヤモシが泣くのを止め、男の後ろ側でこちらを向いて笑っているのを見た。

初めて肌で危険を感じた程の禍々しい雰囲気か辺りを包みこみ、この男もホレソの様子を見て感じとった。

「うははあぁあ!!」

ヤモシは狂気に満ちた笑い声をあげ男の足を掴み、そのまま持ち上げ鞭を打つように地面に叩きつけた、何度も何度も繰り返す。

ブチツ！と音がして男の体から足が千切れ、

原型を留めていない顔面を手を持った足で潰した後

そのまま気を失ったヤモシ。

しばらく恐怖で動けないでいたホレソだが
あの落ちてきた女の言葉を不意に思い出し、助けないといけないよ
うな気になって

ヤモシを誰もいない場所へ運んだ。

数時間が経ち目を覚ましたヤモシはまたすぐに泣き出したが、今度
は興奮させないように静かに優しくなだめ落ち着かせる。

ホレソ「なあおい、落ち着いたか？俺の言ってる事わかるか？」
理解しているのかしていないのかわからないが
とりあえず何が起こったか、母親はどうなったか説明した。

どこに行く事も出来ない、1人では何もできないヤモシは、自然と
ホレソに付いて回るようになり

いつの間にか言葉を覚え、いつの間にか15年の月日が流れてい
た。

そして今に至る。

ホレソ「つー訳なんだよ、エライ長い事喋っちまったな。初対面の
お前によお。」

ウーリ「そういえばあいつ確かに尻尾が無かったな…。どうなっ
たんだよ、そんなガキの頃から化物じみてたのか…。」

ホレソ「あいつは大猿にはなれない。尻尾がないからな。おそらく
変身出来ない分、大猿の力が通常の姿に凝縮されてるんだろうぜ。」

コウライ「…どうりでバカみてえに強い筈だぜ。イテテ…。殴られ
た瞬間屁が出ちまったくらいだからな…。」

途中から話を聞いていたコウライは
悔しそうな顔をして起き上がり話に参加した。

そんなコウライの姿を見てウーリとホレソは息が出来ない程笑っ
ていると、大猪を担いだヤモシが戻って来た。

ヤモシ「…山にこの前の奴らがいる。」

皆が一斉にヤモシの顔を見て

どこで見た!?!と迫りヤモシに道案内させた。

山の頂上付近まで行き、目の前に現れたのは
謎の四つ足の物体。

ウーリ「おい、なんだこりやあ?こんなもん見た事ねえ。」

朝活

おい！おいエテ公！いつまで寝ておるんじや！
ファースの修行に取り掛かって半年が過ぎた。

ヤード「しかしお前さん達エテのガキはたった半年あまりでずいぶんと成長するもんじやの。元から可愛げは無かったが、さらにツラが酷くなっておるわ。」

ベジータ「??、そうなのか？自分じゃ良く分からん。」

寢床にしている巨大樹からなるモーニングルーティンという名の実を頬張りながら身支度をするベジータ。

このモーニングルーティンという果物には特殊な成分、イイネイツパイウレシチンが多く含まれており疲労回復、承認欲求を満たす等多彩な癒し効果が得られる。

ヤード「さて、エテよ。この半年間お前にファースの鍛錬を行なっていて気がついた事がある。何か変だとは思っていたが昨日の出来事で確信した。お前はファースの使い手にはなれん。」

ベジータ「な!?!なんだと!!今何と言った！俺様にファースが使えないだど!?!」

ベジータは半年間の修行で確かに戦闘力自体は向上したが肝心のファースの発現には至らなかった。

そして昨日、いつものようにファースの力を引き出す上で最もポピュラーなトレーニング、花咲けわっしよいをしていた。

枯れた花にただ手をかざして花を咲かすイメージを持つだけのトレーニング。

普通なら花がポンつと咲いて成功！わーい！の流れのはずがベジータの場合違った。

地面に置いた花に手をかざしていたベジータの手からはボンつと言う音と共にエネルギーの塊が放出され、地面ごとえぐり、焦げた臭

いと煙が上がった。

うおー！ファースすげええ！ファース出た！とぬか喜びしていたベジータだったが、ヤードは目を見開き口をあんどりと開けそのまま引きつった気持ち悪い笑顔で、

よ、良かったなエテ公：！（え。何あれ。見たことない。）とだけ言って寝床に帰り、動揺した心を落ち着かせる為に寝た。

ベジータ「さあ説明しやがれ、いったい何が言いたんだババア。」
ヤード「お前のは、ファースであってファースではない。ファースとは表裏一体のエネルギー体じゃ。昔若い頃にチラツと聞いた事があるが確か、ある界限では”気”、”チャクラ”等と呼ばれておる力じゃ。」

ヤード曰く、ファースとはあらゆる生物の体内にあり誰もがその才能を備えている。

しかしその未知の力の存在に気がつかないまま生涯を終える者ばかりであって、むしろそれが普通なのだという。

そして、開花したとしても使いこなせなかったりファースの容量そのものが小さ過ぎて結局のところ意味の無い物になってしまう事も良くある。

だが、ベジータの体内にあるのはファースではなかった。

ファースの力が陽だとしたら、このエネルギーは陰。

癒しを与える力がファースだとしたら、破壊を与えるのがこのエネルギー。

ベジータ「キか、チャクラか何か知らねえが強くなれるんなら関係ない。さつさと次のステップに進めやがれ。」

ヤード「あ、ああ。じゃがエテよ、ファースの力では無いのならば話が違ってくる。何故ならワシにはその”気”というエネルギーの知識が無いからじゃ。色々試してはみるが…。」

ベジータは舌打ちしながら昨日の要領で巨大樹に手をかざした。体の内側から感じる力を掌に一点集中させ、凝縮し、解放。

とてつもない爆音と共に掌から放出させたエネルギー弾は巨大樹の根本にどデカイ穴を開けてなぎ倒した。

ヤーダ「な、なんじゃそのとてつもない力は……！いとも簡単に巨大樹キョコンを倒してしまうとは……。いったいどれ程の容量をしているんじゃ……。」

ベジータ「はあ……はあ……はあ……はあ……。だ、ダメだ……！発撃つただけでこの疲労感……、ま、まともに呼吸ができねえ……。」

息遣いも荒くなり、ガクガクと膝が震えて、まともに立っていられなくなつたベジータは力無くへたり込んだ。

ヤーダは新しいモーニングルーティンを持つてくると言つて一旦その場を離れた。